
桐山花応（きりやまかのん）の科学的魔法

境康隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きりやまかのん

桐山花応の科学的魔法

【Nコード】

N5729Y

【作者名】

境康隆

【あらすじ】

きりやまかのん

桐山花応は科学の娘を自称する、科学好きで友達のない残念な高校一年生。愛称は花応。ある日登校の途中、不思議生命体を名乗るペリカンにしか見えない人語を話す野鳥——ペリカンのジョーと出会う。ジョーは十年前に世界を救った魔法少女を捜して欲しいと花応に願い出る。断る間もなく、敵に襲われる花応とジョー。花応はその非科学的な敵に、科学の力で立ち向かっていった。

一、科学の娘1

一、科学の娘

少女は悲鳴を上げた。

「キャーッ！」

全身を襲った衝撃。宙に浮く体。瞬時に明暗が入れ替わる己の視界。

その衝撃に堪らず上がった悲鳴が夜の街路をつんざく。

「く……」

すべての不利を内に押し殺し、少女は薄やみの中、街灯を頼りに身構える。

叩きつけられた民家のブロック塀が、引きはがした身体分だけ僅かにへこんでいる。まるでお尻をどけた後の座布団だ。

だが何とかそれだけで済んだ。

十年ぶりの魔法。障壁を展開するのは、辛うじて間に合ったようだ。

だが――

「……」

そう、だが少女は次の手が浮かばない。

本来なら障壁を展開するのは、敵の攻撃に対してなのだ。それが間に合わない。相手の速度についていけない。相手の攻撃に合わせることができない。

結果触手に叩きつけられ、ブロック塀と我が身の間に魔力を向けるのが精一杯だった。

少女は長くしなやかな髪を左右に振る。だが視界は戻らない。

「く……」

視界がぼやけるのは、夜目と髪のせいかと思った。しかし違うよ

うだ。たった一発の敵の攻撃に、体が悲鳴を上げているらしい。

十年前なら魔法の杖の一振りで蹴散らしていた。その程度の相手に今の少女は歯が立たない。

十年ぶりに手にした、魔法の杖。子供の頃は大きく感じた。今は少し小さく感じる。杖の大きさはもちろん変わってなどいない。おそらく内に秘めた力も変わってはいない。

そう――

「もう……魔法少女って年じゃないしね……」

そう、変わったのは少女だ。長ずるにつれて、魔法の力がその身から零れ落ちた少女だ。

新芽が種子の殻を自然と落として成長するように、少女の身からはらりと魔力は落ちてしまっている。

自分が魔法少女だったことすら、忘れかけていた少女だ。高校に入学する年になり、机に奥に隠してあった魔法の杖を、自分でも忘れかけた少女だ。

「それでも！」

それでも少女は魔法の杖を構える。

たとえ自分の力が十年前より劣っているとしても。たとえ変身すらできなくとも。たとえ勝てなくとも。

今この敵に立ち向かえるのは、この世界で少女だけだ。少女はそう覚悟する。

家を飛び出す際、とっさに着替えた高校の制服。その長い――校則通りの長さの――スカートの裾を、少女は翻す。

正面より相対する、小山のようなスライム状の敵も身構えたように少女には見えた。

「お母さんには、すぐ戻るって言っちゃってるのよね……」

少女は渾身の魔力を魔法の杖に送る。素材不明の金属と思しき柄に、先端にこれまた材質不詳の宝石と飾りがついた杖だ。

柄の金属が『キン――』と静かに鳴り、先端の宝石が『ポッ』と内から淡く光る。

少女はその切れかけのガス灯のような、淡い光に目を凝らす。

「頼りないけど……食らいなさい!」

その身より多数の触手をくねらす、スライム状の敵。十年前なら捨て駒のように扱われていた敵だ。

その敵を全力をもって倒すべく、少女は魔法の杖を振りかざして前に駆け出した。

新高校一年生——桐山花応きりやまかのんは朝の通学路で固まっていた。

やっと着慣れてきた制服の裾と、短い髪が風に揺れる。

そこには何かがいた。

「ペ……ペリカン?」

そう、ペリカンだ。

ペリカンの死体が、路上に放置されていた。

花応は自慢のつり目を大きく見開いた。少々きつく見える目じりの吊り上った鋭いまなざしだ。その視線でまじまじと路上に放置された水鳥のしたいを見つめるが、花応にはどうしていいのかわからない。

「えっと……保健所……警察……市役所……」

高校の通学途中にペリカンの死体を見つけてしまった。どうしたらいいのかなど、一介の女子高生である花応にはとっさに分からない。

花応はこの春高校に入学した。ここはわざと通学路に選んだ、大通りを一筋外れた寂しい道。人ごみが苦手なので、いつもはお気に入りの通り道だ。

だがこの道を通学路に選んだことを、今日だけは後悔した。

そう広くはない住宅路を、塞ぐようにその身を伸ばして転がっている水鳥の死体。第一発見者は、どうも花応らしい。

「ごめんなさい、だけど……」

花応は民家の塀に身を寄せる。水量が割に多い側溝の上だ。ここ

だけが雪解け水でも流れてきているのかと、錯覚を覚えそうになる水流を見せている。歩きながらも、水のながれる音がよく聞こえる。

花応は側溝の上に慎重に足を乗せた。壁ににじり寄るように背を向け、花応は血まみれのペリカンの足先を回る。

「私携帯苦手なの……保健所も、警察も、市役所も、番号だって分からないし……」

花応はそう独り言を呟くと、恐る恐るペリカンの足をまたごとくする。なるべく見まいと目までつむった。

思わず鞆の中に忍ばせた、ガラスの小ビンを布越しに握りしめる。それはお守り代わりに、いつも持ち歩いているものだ。

「ペリ……」

「——ッ！ ペリ？」

不意に上がった声に、花応は思わず立ちすくむ。

「ほ、保健所の前に……動物……びよ、病院を……ペリ……」

「えっ？」

花応は驚いて目を開ける。辺りを見回すが、人の気配などない。弱々しい声が、途切れ途切れに近くで聞こえたはずのに、どこにも人影はない。

「何？ 誰？」

「こっち……ペリ……」

「えっ？」

花応は声のした方——自分の足下に視線を落とす。そこで目にしたのは、血まみれの水鳥の死体——ではなく、瀕死のペリカンのふるふると持ち上げられた首だった。

「なっ？」

「いや。どうもペリ……驚かせて申し訳ないペリ。できれば、近くの動物病院につれていってもらえると、嬉しいペリが……」

横たわっていたペリカンは、首だけでもたげて花応を見上げていた。
「なっ！ 何？」

「何と言われましても……見ての通り瀕死の重傷を追った、可哀想な不思議生命体ペリ」

「ふ？　不思議生命体！」

「そうペリ。こちらの世界のペリカンによく似てるペリが、私はこう見えて、そんじょそこの水鳥ではありませんペリ」

そう言っぺリカンは血まみれの体を起こした。乾いて黒くなりだした血が、ペリカンの全身の白い羽毛にこびりついていた。

「ペ、ペリカンにしか見えないけど……」

「語尾にペリがつくので、よく誤解されるペリ」

「誤解って……」

今や立ち上がり自分の背丈の程ある水鳥を、この少々釣り目の少女はまじまじと見る。

花応は背が高くない。背は一五〇に届かない。

ならばこの水鳥もその前後の体長だろう。

大きさといい、姿形といい、ペリカンにしか見えない。

「羽毛は？」

「白いペリ」

「くちばしは？」

「黄色いペリ」

「水かきは？」

「自慢の一品ペリ」

花応の矢継ぎ早の質問に、不思議生命体とやらは羽を広げ、くちばしを突き出し、水かきを上げて見せる。

怪我をしている割には、それは元気な仕草だった。

「えっと――」

答える度に自慢げにその部位をさらす水鳥に、花応は結論を言うてやった。

「ペリカンよ！」

一、科学の娘2

少女は自宅の机で鞆を持ち上げた。そのとたんに体中が悲鳴を上げる。

痛い――

だが声には出せない。家族に不振がられる。

昨日の晩の攻撃で、体に傷を負った。外見上の怪我は魔力で直したが、力の失った少女にはそれ以上のことができない。

「いって、きます」

努めて明るく言ったつもりだが、少し途切れ途切れだったかもしれない。玄関の僅かばかりの段差がづらい。本当なら、そう十年前なら服も痛みもあつという間になおった。

痛感させられる。もう自分には力がないのだと。

「仕留め損なっちゃったし……」

少女は昨晩の敵を思い出す。渾身の魔力で放った魔法に、身をよじって悲鳴を上げた敵。その場は退いてくれたが、倒せていないのは明らかだった。

「……」

少女は鞆に忍ばせた魔法の杖を思い出す。これからは持ち歩かないと、いけないのかもしれない。

「所持品検査とか……ないよね……」

少女はそう言ってため息をつく、家を後にした。

「自信を持って否定できないところが、大変づらいペリ」

人語を話すペリカンは、照れたのか妙に人間臭く、白い羽で黄色いくちばしをなでた。水かきのついた一方の足で、もう一方の足を掻きまでしてのける。

「瀕死ではあるペリが、まだ保健所は勘弁して欲しいペリ。それと

私の名前は――」

「もう、それ以上しゃべらないで。人がきたら、私まで変な人と思われちゃう」

花応はペリカンの言葉を、右手を挙げて制する。

人通りの少ない通りとはいえ、全くない訳ではない。

実際花応達が話しているのは、人様の民家の前なのだ。

ペリカンとしゃべる少女――。

「不思議ちゃんだわ。ご遠慮するわ。風評に乗ったらどうするのよ？」

「はい？ ペリ」

「だからペリカンが人話を話すなんて、そんな非科学なことありえないの」

「非科学ペリか？」

「非科学よ。疑似科学よ。魔法じゃあるまいし。こう見えても私は科学の――」

「魔法ペリよ。実は魔法しょ――」

――ドンッ！

という衝撃音とともに、花応とペリカンの言葉はそこで遮られる。大地が揺れた。

「何？」

「敵――ペリッ！」

衝撃音の方に首を向ける花応。

そこに――

「何、あれ？ えっ？ ゼリー？ おっきな寒天？」

そう、そこには花応が思わず呟いた感想の通り、小山のようなスライム状の物体が落ちていた。

色は半透明の青色。弾力性のある質感が、落ちた衝撃からかフルフルと震えている。

「敵ペリよ。人間を逆恨みする者の末路ペリ」

「て、敵って……」

「気をつけて下さいペリ！ 奴らは人を傷つけることなんて、何とも思っていないペリよ！」

不思議生命体を名乗るペリカンはそう言うと、花応とスライム状の物体の前に割って入った。

「あなた……そんな怪我で……私を……」

「一般人は巻き込めないペリ。今のうちに――」

――ゴォォォアアッ！

敵と呼ばれたスライムが、大きく身を震わせて全身で咆哮のような音を発した。

「――ッ！ 怖いペリ！」

ペリカンがあっさりと、花応の後ろに隠れた。

「こらっ！ 何が巻き込めないだ！ 守りなさいよ！」

「瀕死のペリカンに、守るなんて無理言わないで欲しいペリ……」
スライムの一部が、触手状に伸びて体から飛び出した。

「瀕死の割には、元気じゃない！」

「ああ、貧血がペリ……」

ペリカンはわざとらしくふらついて、花応の制服のスカートにしがみつく。

「不思議生命体なんですよ！ 何とかしなさいよ！」

「非科学ペリよ。か弱い水鳥に助けを求めるのは」

幾本かの触手が、唸りを上げて振り回された。

「あのね……」

――ヒュン……

と風切る音がして、後ろを振り向きかけた花応の顔の横を、何かが通り過ぎた。

「えっ？」

花応が目を見張る。

自分の顔の横を横切った触手は、その足下の側溝の蓋に叩きつけ

られている。

舞い上がる土ぼこりに、コンクリート片。コンクリートの蓋が粉々に砕け散っていた。

触手は元の位置に戻され、再び唸りを上げて振り回されている。

「ちよっ……ちよっと!」

「ににに、逃げるペリよ!」

ペリカン花応のスカートをがっしりと掴んで離さない。

「離さないよ! 逃げられないでしょ!」

「見捨てないで欲しいペリ!」

「こ、この……」

敵はにじり寄るように、体を震わす。軟体動物のぜん動のように、体を震わせながら前に進む。

「え……何……」

「あわわ……ペリ……」

花応とペリカンはゆっくりと、後ろに足を運ぶ。相手を刺激しないように、ゆっくりと後ろに進む。

だがよく確かめずに後ずさったせいか、そのすぐ後ろの何かにぶつかってしまう。

「あっ?」

「電柱ペリよ」

そう、すぐ後ろは電柱だった。そして横はブロック塀。

花応達は自ら、逃げ場のない角に追いつめられてしまった。

その時――

――コッン……

と何か固いものが、そのブロック塀にあたった。

それは花応のカバンの中の――何かだった。

一、科学の娘3

少女は鞆に忍ばせた魔法の杖を握りしめた。悪い予感が、少女の背中を這い上がったからだ。

撫で上げられたような怖気だ。身震いとともに、寒気が一気に全身に伝わる。

「敵——」

そう、これは敵の気配。少女が肌で感じる敵の存在。

近くで、そう遠く離れていないところで、その気配がする。昨日取り逃がした敵だろう。

「どうして……」

だが分からない。どうして自分のところに現れないのかが分からない。

敵の気配がする。だがどこかそれは遠い。自分に挑みかかってくる気がしない。

だとすれば——

「誰か……他の人が襲われているの……」

それはあってはならないことだ。

「あなた達の敵は——私よ！」

少女は敵の気配のする方へ駆け出す。それは自身の通学路とは、一筋外れた寂しい道だった。

ブロック塀にあたったガラスの感触。鞆越しにその感触が花応に伝わる。

「逃げるわよ……」

「下手に動くと襲ってくるペリ……」

敵は力を溜めるかのように、一度止まってその場で身を激しく震わす。

「任せなさい……」

花応はそう言うと、勢いよく鞆に手を突っ込んだ。

軽くまさぐり取り出したのは、先ほど握りしめたガラスの小ビンだ。

「なめないでね……私は――」

花応はそう言うと、ガラスの蓋を外す。即座に広がる鼻をつく臭い。

だが花応はその臭いに不快な顔どころか、会心の笑みを浮かべる。

「私は科学の娘よ!」

「臭いペリ……」

「臭いのは当たり前。これは灯油よ」

笑みのまま、花応が応える。その顔は何故か自信に満ち溢れていた。

ガラスの小瓶の中で粘液質の液体が揺れていた。その揺らめく油の更には、なにやら鈍い光を放つ金属質な物体が浮かんでいる。そう、それは金属質な光を放っているが、それでいて何処か柔らかい。まるで粘土でできた金属だ。

その金属が灯油の中に浮かんでいる。

「灯油……油ペリか……燃やすペリか……」

敵は触手を振り上げた。

「違うわ……」

そう言うと花応は小ビンを傾け、その灯油をアスファルトの上に捨ててしまう。

「――ッ! 何してるペリか! 捨てちゃ――」

「灯油は捨てないとダメなの!」

「何故ペリか? 武器に――」

「武器はこっちよ! さあ、逃げなさい!」

花応はそう叫ぶとペリカンを押し退け、小ビンをふるう。小ビンの中に残っていた、鈍い銀色を放つ物質が宙を舞う。

敵の触手が唸りを上げて、花応の頭上に振り下ろされた。

その攻撃が花応達を襲う瞬間――

「食らいなさい！ 水とは混ぜてはいけない！」

花応の自慢の――そして自信に彩られたつり目が、相手の攻撃を見据える。自分の放った物質が、狙い通りに割られた側溝の中に消える瞬間――花応は叫んだ。

「アルカリ金属！」

一、科学の娘4

少女は敵を見つけた。やはり誰かが襲われている。駆ける足を速める。魔法の杖を鞘から抜き放った。

スライムの半透明の体越しに、ぼんやりと少女の姿が見える。

制服！

襲われている少女は制服を着ているように見えた。スライム越しではよく分らない。

ましてや全力で駆ける少女の揺れる視界では、大雑把にしか把握できない。

うちの学校の生徒――

少女はそのことにまず気づいた。

襲われている少女が着ている制服。それは今少女が着ているのと同じ制服だった。

そしてそのすぐ後ろには、先端にいく程細長い花瓶状の白い物体がいる。

何？ 敵なの？ 二体も――

もはや一刻の猶予もない事態と見た少女は、魔法の杖に魔力を送る。

柄が甲高い金属を鳴らし、昨晚よりは力強い光が先端の宝石に灯る。

「食らいなさい！」

少女が魔力を炎に変え、敵に叩きつけようとしたその時――自身に満ち溢れた少女の声がした。

「アルカリ金属！」

花応のその叫び声とともに、側溝が爆発した。

同時に大量の水しぶきが立ち上がる。

——ゴォォアアッ！

敵が驚きの怒号とも、怒りの咆哮ともとれる雄叫びを上げた。

「逃げるわよ！」

花応はすかさず身を翻してそう叫ぶと、ペリカンを脇に抱えるように走った。

後ろでは爆音を上げて、いまだに大量の水しぶきが上がっている。

「何ペリか？ 水柱が上がったペリよ！」

抱えられながら自らも空中で無駄に足を漕ぎ、ペリカンは背後と花応の顔を交互に見やる。

だが吹き上がった水しぶきで、その向こうの敵は見えない。

「アルカリ金属よ。アルカリ金属は水と激しく反応するの」

「水？ 反応？ 爆発してるペリよ！ 魔法ペリか？」

「違うわ——」

花応は角を曲がる。目指すは大通りにつながる公園だ。

「科学よ！」

花応は公園に飛び込んで振り返り、誇りと自信に満ち溢れた顔で言い放った。

「何なの……」

少女はずぶぬれになりながら呟いた。敵はまたもや逃してしまった。

残されたのは水浸しの制服を着て、路地に残されたこの少女一人。

「何なのよ……今の……」

少女はもう一度呟いた。

「……」

「……」

花応とペリカンは黙って今きた道を見つめる。公園に飛び込み、一通り二人して息を整えた。

敵と呼ばれたモノの追ってくる気配はしない。

「追ってこないペリ……」

「だといいんだけど……」

公園から恐る恐る道をのぞいた花応は、左右も見回してから言った。

「逃げたペリか……」

「そう思いたいけど……」

花応はため息まじりにそう呟くと、近くのベンチに腰を下ろす。その横でペリカンが同じく腰を下ろした。足を前に投げ出す、人間臭い座り方だ。

「……」

「何ペリか？」

「別に……今更座り方一つで驚いたりしないけど――」

花応はベンチで息を整える。

「ホント非科学ね」

「不思議ペリか？　不思議生命体冥利に尽きるペリ」

「不思議よ。不思議。大いに不思議だわ。私はね、科学的じゃないのは嫌いな。オカルトとか。超常現象とか。信じないタイプなの」

「……ペリ。オカルトでも、超常現象でもないペリ。魔法ペリ」

ペリカンはベンチで胸を張って言う。

「一緒よ。非科学よ。ペリカンのなりして人語を話さないでくれる。科学的でないわ」

「でも、現に目の前で話してるペリよ。それに曲がりなりにも、危険を共にした仲ペリ。名前ぐらい訊くのが礼儀ペリよ」

「ぐ……生意気ね……」

「人の意見が生意気に聞こえるのは、相手を下に見ている証拠ペリ。」

そして正論を言われている証拠ペリよ」

「フンッ！　じゃ、名前は？　てか、何者よあなた？」

「名前はジョー。不思議生命体のジョーペリ」

「不思議生命体？　ジョー？　ペリカン・ジョー？」

「ペリカンではないペリよ」

袋の垂れ下がった黄色いくちばしを向けて、ジョーと名乗った水鳥は花応に伝える。

「ペリカンよ。どのくちばし下げて、ペリカンじゃないとか言うのよ」

「ペリ……」

「まあ、いいわ。ペリ環状反応に名前が似てるから、特別に許してあげる」

「ペ……ペリ？　ペリカンジョーハンノー？」

「周辺環状反応とも言うわ。五つ種類があるんだけど、 π 電子系の——」

「ペリ……わ、分からないペリ。あっ、お名前は？　聞いてなかったペリ」

「私？　私は桐山花応。化学反応の『化』に草冠の『花』と、化学反応の『応』で花応」

花応はカバンから絆創膏を取り出した。

箱ごと取り出したそれには、『桐山メデイカル』と印字されている。

「ペリ」

「ペリって……漢字分かるの？」

花応はジョーの羽をかき分け、血が出ていると思しきところに絆創膏を貼ってやった。

だが羽が邪魔をしてうまくいかない。花応は数を頼りに傷口の周りに、ひたすら絆創膏をあてがう。

「少しは分かるペリ。不思議生命体の世界では、日本語が分からないと友達の話題についていけないペリ」

花応に身を任せながら、ジョーが自慢げに答える。

「何だよ？」

「人間界から漏れ出てくる電波。それを拾って見るのが、サブカルチャーの代名詞になっているペリ。一番人気は日本の深夜放送ペリ」

「あつ、そ……」

「ところでさっきのは科学ペリか？」

ジョーが嬉しげに右の羽を上げた。せっかく貼った絆創膏が、その動きで何枚かはがれてしまった。

「そうよ。水と激しく反応するのよ、アルカリ金属は。見ての通り爆発的にね。だから普段は灯油に入れて保存するの。モノが何かまでは詳しく聞かないでね。怒られるから」

「ペリ……何故ペリか……」

「持ち運ぶようなものじゃ——ないからよ……いくら科学の娘でもね……」

花応は真剣そのものの口調で呟いた。

一、科学の娘5

「科学の娘ペリか？」

「そうよ。おぼさんの口癖なんだけど、私も気に入っているの」

「そうペリか」

「じゃあね。あなたのことは、一瞬で忘れることにするわ」

花応はそう言うと、スクツとベンチから立ち上がる。

「何故ペリか？ 生死を共にしたというのに、素っ気ないペリ――モガッ！」

花応のカバンがペリカンの顔面にめり込んだ。

「私は巻き添えを食っただけ？ 違う？」

「ち、違わないペリ……」

ベンチから吹き飛ばされたペリカンが、地面に突っ伏し息絶え絶えに応える。

「じゃあね」

「待つて欲しいペリ！ 頼みたいことがあるペリ！」

公園の出口に向かう花応に、ジョーが慌ててついていった。

「ついてこないでよ」

「冷たいペリ」

「うるさい。ペリカンに親切にする理由なんてない」

花応は注意深く辺りを見回しながら公園を出た。また狙われてはかなわない。

「科学がお好きペリか？」

「もちろんよ。化学薬品が手放せないわ」

「……ペリ。それはどうかと……」

「何？」

「ペリ……」

花応はいつもの通学路に戻る。やはり人通りは少ない。

辻々にさしかかる度に、一筋外れた大通りが見える。その大通り

では花応と同じ制服を着た生徒が、何人かで楽しそうに通学していた。

「あっちの方が賑やかペリよ」

「ほっときなさいよ。私はこの道が好きなの」

「また襲われたら大変ペリ」

「襲われたのはあなた。私のことが心配なら、離れてくれない？
てか、何でついてくるのよ？」

「花応殿、寂しいこと言わないで欲しいペリ。一人じゃ不安ペリ」

「だったら尚更こっちの道でしょ？ ペリカン引き連れて、あんな大通り歩ける訳ないでしょ？」

「ジョーのことなら心配無用ペリ。不思議生命体は不思議がられてなんぼペリ。むしろ女子高生にちやほやされたいペリ——モガッ！」
「うるさい」

花応のカバンがジョーの後頭部を直撃した。

「痛いペリ。花応殿は暴力が過ぎるペリ」

「うるさい。怪我見てやったんだから、もう用はないんでしょ？
どっかいきなさいよ」

「そもいかないペリ。ジョーはこの世界に人を捜しにきたペリ。
見つかるまで帰れないペリよ」

「人捜し？」

「そうペリ！ 魔法少女を捜しているペリ！ とても大事な仕事ペリ。
できれば手伝って欲しいペリ」

「魔法少女？ はっ！ 非科学ね……何で私が……」

「できる限りでいいペリ」

「そう……できる限りね……」

花応が眉をひそめて深刻な顔をしてうつむく。

「手伝ってくれるペリか？」

「できる限りならね」

「本当ペリか？ 魔法少女の名前は——」

「あっ、ゴメン！ もう学校着いちゃった！」

いつの間にか目の前に現れていた学校の横手のブロック塀。それを見上げて花応が嬉しそうにジョーに振り返る。

「ペリ？」

「もうこれ以上は無理。できる限りの限界点！」

花応はまくしたてるように言うと、大通りに面した校門に走り出す。今まで見せたことのないような笑顔で、ジョーに手を振って去っていく。

「じゃあね！ お互いすぐに忘れましょうね！」

「ひどいペリ……」

ジョーは一人取り残されぽつりと呟いた。

一、科学の娘6

「酷い目に遭ったわ」

花応は学校の机に突っ伏すようにへたり込んだ。

周りで誰かが聞いている訳ではない。花応の周りにはそれぞれの生徒が席に着き、もうすぐ授業が始まるのか教科書の用意などに追われていた。

「独り言とは……我ながら非科学だわ……」

花応は『非科学』と口に出しながら、それでも独り言を続ける。生徒が集まり、授業が始まる束の間の時間。皆がそれぞれに昨日の話題や、今日の授業などについてとりとめのない会話を交わしている。

「……」

花応の周りには誰もいない。一人窓際に座り、教科書も出してしまおうと、早々にすることもなくなった。

だから一人突っ伏し、独り言も呟いてしまおうのだろう。

「きやはは！ バツカでえ！」

「何で、ジャージなんだよ！」

その花応の耳にクラスメートの嬌声が否応無しに届いてくる。

バカはあんたらよ――

花応はそう呟く。それは先程の独り言とは違い、何処か乾いた声色だった。

そう、かかわらないように。そして巻き込まれないように。届かないように――花応は小さく呟く。

「……あの、止めて……」

続いて届けられた弱々しい声。

「……」

花応はチラリとそちらを見た。

何故か一人の女子生徒が制服ではなくジャージを着ていた。その

生徒が大勢の他の生徒に取り囲まれている。

「はあ？ 『止めて』って何よ？ 人が心配してやってんだろ」

「えっと……その、朝からずぶ濡れに……」

ジャージの生徒は怯えたように身を縮こまらせ、周囲の女子生徒をおどおどと見上げていた。

「そんな態度だから、標的になるのよ……」

花応は今度も一人呟く。

「ああん？ 何？ 朝から水でもかぶったっての？」

「何で、朝から水、被るのよ？ バカなの？」

「何？ 何？ いじって欲しいの？ そこまでして、私たちの相手して欲しいの？ きゃはは！」

「……あの、その……」

周囲の生徒はかぶせるように質問をしてくる。ジャージの生徒はそのいちいちに答えられない。

「とれーよ。自分のことだろ。とっと答えろよ」

「……えっと、大したことないんだけど……」

「ああん！ 声、ちっちゃ！ 聞こえないって！ てか、本当はどうでもいいし！」

「ちよっ！ 興味なくすの、早っ！ あはは！」

「でも、ジャージで授業、マズくね？ 脱げば？」

「え……」

はやし立てる周囲の生徒の最後の提案に、ジャージの生徒は固まってしまう。

「いいね。どうせ、こっちも『大したことない』んだろ？ 貧相な

下着で授業受ければ？」

「あはは！ そのイケてないジャージより、よっぽどいいかもね！」

周囲の女子生徒達はお腹を抱えて笑い出した。

「そんな……」

ジャージの生徒はオロオロと周囲に助けを求める視線を送る。

花応はその生徒と目が合う前に視線を前に戻した。

「非科学だわ……」

花応は呟く。

だが嬌声だけは顔を前に向けても、きつちりと教室中に響いて行く。

ジャージの女子生徒は実際に服を脱がされかけているようだ。周りの生徒と揉み合う物音が、否応無しに花応の耳に届く。

「ホント、非科学ね……きっぱり断ればいいのに……それか、私みたいに、バカの相手はしなけりゃいいのよ……」

「あの、止めて……」

その行為はエスカレートしているようだ。

初めは本気で脱がす気などなかったのかもしれない。だが嫌がる生徒の態度が、周囲の生徒の嗜虐性を刺激したのか、それとも単に止め際が分かりかねるのか。ジャージはその柔らかい生地ของせいも相まって、女子制度の柔肌をあっけなく曝そうとしていた。

いい加減にしなさいよ――

花応は内心、そう苛立ちの声を上げる。

非科学だわ……何の生産性もないじゃない――

花応はやはり口には出さない。それでも我慢できなかったのか、視線だけはチラリとそちらを見てしまう。

そうよ……かかわらない方が生産的よ……科学的だわ――

花応は視線を元に戻そうとする

白い下着が見えた。

「ちよつと……」

花応が思わず立ち上がろうとした。

ちよつとは、私よ……かかわろうとするなんて、非科学な――

花応は己の考えとは裏腹に出た言葉に、内心舌打ちしながら立ち上がる。

その時――

「何をやってるの！」

花応のその小さな声も、助けを求めるか細い声も、教室中にまき散らされていた嬌声も。

その全てを呑み込んで――凜とした声が教室の入り口から響き渡った。

がらりと開けられた教室の入り口。

険しく、厳しくも、凜々しい視線を投げかけて――

「何をやってるのって――訊いてるのよ！」

一人の女子生徒がそこには立っていた。

一、科学の娘7

「つまらないこと、してるわね」

毅然とした態度で、それでいて――

「はあ？ 千早^{ちはや}さん。何ッスか？ 遅刻寸前に駆け込んできて、優等生面ッスか？」

そう、たった今まで走ってきたかのように赤く上気した顔で――千早と呼ばれた女子生徒は教室の中を睨みつける。

「うるさいわね。実際遅刻してないんだから、いいでしょ。まあ、今は――」

千早はもう一度輪になっていた生徒達を見回す。その中では怯えた様子で女子生徒がはだけていたジャージの裾を何度も押さえていた。

「もっと、早く来てれば良かったって思ってるけど」

「私ら、遊んでやってただけだけど？」

教室に入ってきた女子生徒に、ジャージの生徒をからかっていた生徒の一人が答える。

答えた生徒に同意するかのように、他の生徒もニヤニヤ笑いながらその女子生徒を迎える。

「『遊んで』――ですって？」

千早と呼ばれた生徒は、その人数に恐れも見せず女子生徒達の前に進み出た。

「千早？ そんな名前だったんだ……目立つのよね。あの優等生さん」

花応は千早の顔を見上げる。花応と違いためらいもなく問題に飛び込んで行ったクラスメート。気のせいか授業開始前の陽の光が、彼女を中心に照らされているように見える。

「ま、誰の名前も、あんまり分らないんだけど……」

花応は喧噪の続きに目をやりながら一人呟く。何故か千早を直視

し続けることができずに、視線を自然とその相手をする集団に移した。

「ん？」

そんな花応はジャージの女子生徒と目が合った。

「——ッ！」

女子生徒は殊更怯えた目で花応と目が合うや背けてしまう。

「何なのよ。失礼ね……そりゃ、かわりたくないけど……」

「ほら、何を騒いでいる。授業始めるぞ」

睨み合う女子生徒達の後ろから国語の教科書を持った教師が現れ、

「はい。授業授業。ほら、優等生さんも、席に着けば」

「ふん。私は別に優等生なんかじゃないわよ」

互いに一言言い残して、騒ぎの輪の生徒はそれぞれの席に着いた。

「退屈な授業……」

花応は窓際の席のため息を吐いた。

視線は開けられた窓の外。己が歩いてきた道路を追っている。

やっと通い慣れた通学路。それでもクラスと雰囲気にはまだ慣れない。

授業は退屈だ。分からないからではない。分かり切っていることを説明されるだけだからだ。

クラスメートにも慣れない。慣れ合わないからだ。

ましてや今日の朝の騒ぎ。首が自然と窓の外を向いた。

目を上に転じると、青い空が何処までも続く。

朝から色々あったしね……普通の授業が余計に退屈——

朝からあった二つのこと。

「非科学な……」

その一方の水鳥の騒ぎを思い出してしまったのか、花応は現実から目を背けるかのように窓の外の空から教室に目を戻した。

「……」

見るとはなしに視線を泳がせると、もう一つの騒ぎの中心だった女子生徒で目が止まった。

「こっちも、非科学よ……しっかりと嫌だって言えぱいいのに……」
ジャージの生徒は教壇の方を見ていた。そして後ろの生徒に背中をペンで強めに突かれ、愛想笑いを浮かべながら振り返っていた。
一人の方が気が楽じゃない……中途半端に構ってもらえて嬉しいものかしら――

そんな女子生徒の様子に花応は眉を一つひそめると、机の上に視線を戻した。

「関係ないわ……えっと、うちの学校のジャージの生地は一般的なポリエステルで……」

花応は授業には関係ない、それでいて科学的なことを呟く。意識して己の世界に入ろうとしているかのようだ。

その手元では国語の教科書の余白に、次々と化学組成式が絵が描かれいく。

「何で、あの子だけがジャージペリか？」

「さあ？ 朝からずぶ濡れになったとか言ってたけど」

「花応殿がそこら中で、今朝の魔法を使ったんじゃないペリか？」

「いくら私だって、ばかすかアルカリ金属放り投げないわよ」

「でも。あの時、敵の向こうに誰かいたペリよ。あの時かもペリよ」

「そう？ 目がいいわね。てか、あれは魔法じゃないって――」

花応はそこまで独り言を呟いて固まってしまふ。ポリアセタールやポリカーボネートなど、ポリエステルに似た名前の化学組成式を教科書に埋めていた手がぴたりと止まる。

そう、それはもはや独り言ではなかったからだ。

「――ッ！ あなた！」

花応が思わず声を荒らげた。イスを蹴飛ばすように立ち上がる。
イスが音を立てて倒れ、授業に集中していた生徒の注目を一瞬で集めた。

花応を含め全員の視線が窓の外に向けられる。

開けられた窓一面を埋めるように、そこには人の背丈程のある水鳥がいた。

片方の羽を人間の腕よろしく上げて、

「ペリ」

不思議生命体ジョーが挨拶らしき仕草で暢気に応えた。

一、科学の娘 8

「キヤーツ！ ペリカンよ！」

女子生徒が先ずは悲鳴めいた喚声を上げた。

窓のサッシに足をかけた、見た目は可愛らしいと言えなくもないペリカン。

その突然の出現に教室は一気に興奮状態に陥った。

見た目は可愛いが、やはり危険が先に立つのだろう。皆が一斉にペリカンから――花応から距離を取り、同心円状にのけぞるように身を退けた。

「桐山さん！ 危ないわよ！」

「優等生？」

そんな中、教室の後ろの方に座っていた千早が立ち上がって駆け寄ろうとする。

私の名前……知ってるんだ――

名前を呼ばれたことよりも、花応は思わずその内容に驚き振りかえる。

真剣な眼差しで駆け寄ってくる千早と目が合った。驚きと我が身を守る為に後ろに下がる他の生徒達とは対照的な姿だ。己の危険を顧みず、一人だけ前に向かってくる。

「ペリカンではないペリよ――」

興奮のるつぼと化した教室の雰囲気も読まず、ジョーが暢気に嘴を開いた。

「――ッ！」

その声を耳にするや花応がジョーに振りかえる。そのままためらいもせず右手の拳を振り上げた。

皆に背を向け、己の体に拳を隠し、花応は水鳥の柔らかな腹部に拳をのめり込ませる。

「グワーツ！」

ジョーが堪らず——そこだけ聞けば水鳥らしい悲鳴上げる。

「今……その鳥、しゃべらなかった……」

驚きに目を見開きながら、千早が花応の下に駆け寄ってくる。

「何言ってるのよ! 『グワッ!』とか、言ってるじゃない?

これは水鳥よ、野鳥よ! ペリカンよ!」

「ペリ……」

「ペ? ペリ?」

「——ッ!」

困惑に眉間に皺を寄せた千早に背を向け直し、花応が更なる拳を繰り出した。

「グワッ!」

今度も上がったのは、少々苦しい野鳥の鳴き声だ。

その一連の様子に教室中がどよめいた。

「ちょ、ちよつと……桐山さん……」

千早が躊躇いがちに片手を上げて、花応を制止しようとした。

「きゃー。かわいい、ペリカン」

花応が抑揚のないわざとらしい喚声を上げた。そのままジョーの首筋をたぐり寄せるように掴まえる。

「……何してるのよ……皆、驚いているじゃない……」

と、花応はその引き寄せたジョーの耳元に小声で抗議の声を上げる。

「……不思議生命体は……驚かれて——不思議がれてなんぼ……ペリ……」

ジョーが同じく小声で応える。だがそれは花応に合わせた訳でも、空気を読んだ訳でもないようだ。

花応に喉を力づくで締められ、空気が充分に肺から出ていないだけのようだ。

「……う・る・さ・い……とつとつ、出て行きなさい……」

「……嫌ペリ……魔法少女——雪野様を……捜して欲しい……」
白いはずの羽毛が、不思議なことにだんだん赤くなっていく。

「……いないわよ、ここにはそんな名前の子……ほら、分かったら……」

「桐山さん……その、大丈夫？」

花応が後ろから声をかけられた。千早だ。

「……ペリ……」

ジョーが花応に勝手に代わって、己は首を絞められているというのに暢気に手を振って応えた。

羽毛は赤から真っ青に変わっていた。不思議としか言い様がない。

「——ッ！ うるさい！ アルカリ金属、嘴から突っ込むわよ！」

花応はそう叫び上げると、

「ペリ——ッ！」

悲鳴めいた語尾を上げる水鳥を窓の外に放り出した。

「桐山さん……」

「——ッ！」

ジョーを教室の外に豪快に放り投げ、花応は窓をぴしゃりと締めた。若干肩で息をしているその花応に、千早が後ろから声をかけた。花応がぎょっと驚いて振りかえると、皆の注目が孤独をきどるこの女子生徒に集まっていた。

「な、何？ びっ、びっくりするわよね！ 急にペリカンが窓にいたら！」

何よ！ この注目は——

と、内心目を剥きながら、花応は話を誤魔化さんとしてか早口に捲し立てた。

「ええ、そうね。その、怪我とかない？ えっと……アルカリ——金属って何？ ていうか、今ペリカンと話してなかった？」

「——ッ！ アアア、アルカリ金属ってのはあれよ！ リチウムとかナトリウムとか、第一族元素に属する元素よ！ 密度小さくって、融点も低いわね！ 比較的柔らかくって金属なのにナイフで簡単に

切断できるわ！ 切断面は光沢のある金属然とした光を放つんだけど、すぐ酸化してしまうわ！ でも、一番の特徴は？アレ？ね！だから、あいつがあんまり、しつこかったから——」

「あいつ？ しつこい？ 鳥が？」

「ななな、何でもないわ！ さあ、授業を——」

花応が慌てて口を開くと、

ガタンッ——

と音を立てて何か柔らかいものが教室の床に崩れ落ちる音がした。

「ちょっと！」

「キャッ！」

「おい！」

生徒達の驚きの声とともに、新たな注目の輪が出来上がる。

「天草さん！」
あまくさ

今度も千早が真っ先に駆け寄ろうとした。

「え？ 何？ あの子——」

花応は状況が直ぐには呑み込めなかったのか、目をしばらくしばたたかせた。

千早が騒ぎの中心に駆け寄り、身を屈めて誰かを抱き起こそうとしているところだった。

貧血らしい。千早の腕の中に青い顔をした女子生徒の表情が見て取れた。

「アマクサさんって言うんだ……あの、ジャージの子……」

花応はその場から動けずに、ポツリと呟くのが精一杯だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5729y/>

桐山花応（きりやまかのん）の科学的魔法

2011年12月20日18時47分発行